

転位を来した円板状半月に対し形成縫合術を施行した1例

○衣笠 和孝(きぬがさ かずたか)(MD)¹⁾, 米田 憲司(MD)²⁾, 濱田 雅之(MD)¹⁾

¹⁾ 星ヶ丘厚生年金病院 整形外科

²⁾ 守口敬任会病院 整形外科

大腿骨外顆部 (LFC) に離断性骨軟骨炎 (OCD) を合併する陳旧性の外側円板状半月 (DLM) の転位に対し, drilling と外側半月形成縫合術を施行した症例を経験したので報告する.

【症 例】

10 歳男性.

【既往歴】

右膝 DLM 損傷に対し半月形成術を施行.

【現病歴】

右膝の術後経過観察中に左膝にも疼痛出現したためレントゲン撮影を行ったところ, LFC に OCD を疑わせる骨透亮像を認めた. また, MRI において DLM の顆間部への転位を認めた. しかし伸展制限, 疼痛を訴えることもなかったため経過観察としていたが, 5 ヶ月後に LFC 部分の骨透亮像の拡大を認めたため, 8 ヶ月後に鏡視下手術を施行した.

【治療経過】

外見上軟骨損傷を認めなかったが, 外側半月板は円板状で辺縁部分に損傷を認め, 顆間部に転位していた. OCD に対しては drilling, DLM に対しては転位する半月に inside-out 法にて 2 針整復用に縫合糸をかけ, 整復しつつ, 形成術を施行することでほぼ本来の位置まで整復できた. この状態で, inside-out 法にて 10 針縫合した. 術後 3 ヶ月時に再鏡視では, 外側形成半月は体部に水平断裂を一部認めたものの辺縁部分は修復していた. 術後 6 ヶ月経過時点で疼痛, 腫脹は認めず, レントゲンにおいても OCD 部分の骨透亮像の縮小したため, 徐々にスポーツ復帰を許可した.

【まとめ】

長期間顆間に転位した円板状半月であっても, 形成縫合術の適応となる場合がある.